

平成 25 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2013年4月～2014年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表
します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満
たないもの、報告書が未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧告させていた
だきますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 岡崎市立新香山中学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 高等学校 中等教育学校
 教員養成 技術/職業教育
 その他 ()

住所 〒 444-2141
岡崎市桑原町字大沢 20 番地 86

E-mail : _____

Website : _____

児童生徒数：男子 _____ 名 女子 _____ 名 合計 298
 名

児童・生徒の年齢 13 歳 ~ 15 歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ()

4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

※当報告書についてはユネスコスクールホームページに掲載するため、活動内容については、添付資料ではなく本報告書にご記入願います。

環境学習を基盤としたE S Dのアプローチ研究 岡崎市立新香山中学校 山内 貴弘

1 研究の内容

「21世紀は、環境の世紀」といわれるように地球の環境に対する危機感や保全の取組は、わが国のみならず、今や世界の潮流となっている。本市においても、そういった背景の中で2010年に「人間と環境のかかわりについての正しい認識に立ち、自らの責任ある行動を持って、持続可能な社会づくりに主体的に参画できる人材を育成すること」をねらいとした「岡崎環境学習プログラム」を制作した。本プログラムの特徴は、以下の2点である。

□義務教育9年間の学習内容、身に付けたい力に系統性がある。

□総合的な学習の時間、各教科とのクロスカリキュラムとして扱う。

さらに、学ぶべき環境は、自然環境はもとより、社会環境、そして持続可能な社会作りのための環境（E S D）の3つを対象分野とした。これら3つの環境（学習分野）を視点に、子どもの発達段階を考慮に入れ、教育課程の見直しを図りながら、年間15時間を基本とするプログラムを作成した。

本校は、平成22年度に岡崎市教育委員会より「環境教育の推進」を委嘱され、3年間、環境学習プログラムに従い、環境教育を進める中で、持続可能な社会づくりにかかわる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることを目標に研究を推進してきた。さらにE S Dを取り入れ、持続可能な社会づくりを視野に入れた学習の展開を目指している。本校のE S Dは、国立教育政策研究所が発行した最終報告に記述されている「6つの構成概念」、「7つの能力・態度」、「3つの指導の留意点」を取り入れ、教師の手立てを構想している。

本実践は、環境学習の有効性とE S Dのアプローチ、探究学習の評価の在り方に関して研究の視点として総合的な考察を行った。

2 E S Dのアプローチ

私たちは、E S Dは概念だが、方法でもあるととらえ、実際に授業においてE S Dの手立てを明記し、実践検証している。そのために「岡崎市環境プログラム」と国立教育政策研究所の最終報告書との関連を明らかにした。

I 「何を学ぶか」 E S Dの6つの視点で環境学習を見直してみると学ぶべきキーワードが浮かび上がる。

| | 2. 3年「持続可能な社会づくりのための共生を考えよう」 |
|-------------------------|----------------------------------|
| 相互性S solidarity | つながり（人、社会、自然、未来）を意識して行動しようとする |
| 多様性H highly-diverse | 様々な立場（消費者、生産者、地域住民、で考える |
| 有限性I incassancy | 資源・エネルギーは有限であることを実感し、エコの必要性を実感する |
| 公平性N non-discriminatory | 具体的な視点で持続可能な社会実現のための方策を考える |
| 責任性C commitment | 世代を乗り越えた倫理観を大切にして、自分事としてとらえる |
| 連携性A Act in union | 地域や社会で取り組む必要であることを認識し、意欲を高める |

II 「どのように学ぶか」 プログラムの身に付けたい力とE S Dの7つの能力観点は、以下のように共有化することにした。

| | CATCH | ACTION | REFLECTION |
|-----------------|-----------|-------------|------------|
| 批判的に思考・判断する力 | 課題識別・設定能力 | | |
| 未来像を予測して計画を立てる力 | 課題識別・設定能力 | | |
| 多面的・総合的に考える力 | 課題識別・設定能力 | | |
| コミュニケーションを行う力 | | コミュニケーション能力 | |
| 他者と協力する態度 | | 自他の理解能力 | 環境社会設計能力 |
| つながりを尊重する態度 | | 活動環境整備能力 | E S D実践力 |
| 進んで参加する態度 | | | E S D実践力 |

Ⅲ「どうやって進めるか」手だてと方法を「つながり」をキーワードにして指導案に明記するようにした。

| 視点 | つながり | | | 活動 | 手だて のキーワード |
|------|------|---|----|-----|------------------------------------|
| | 視点 | 人 | 能力 | | |
| S相互性 | | | | | |
| H多様性 | ◎ | ◎ | | 4,5 | 「ゆうだい君の手紙」をゆさぶり資料として使用する。 |
| I有限性 | ○ | | | | 未来志向で原子力発電を考えたとき、安全性が課題であることを押さえる。 |
| N公平性 | | | | | |
| C責任性 | ◎ | ○ | ◎ | 3 | |
| A連携性 | ○ | ◎ | ◎ | 5 | 持続可能な社会実現に向けて追究課題を設定する。 |

例) 6つの視点と3つの留意点の関連表「未来の日本と地球のために私たちができること」より

3 授業の構想と実践

実践Ⅰ「持続可能な社会づくりのための共生を考えよう」2年生の実践

① 企業の責任（CSR）に向かう 第5～7時

岡崎市環境学習プログラムを取り入れ、1学期は職場体験学習を基盤に据えた学習を展開した。加えて社会見学で、環境に対する多様な視点をもてるように体験活動を中心に構成した。さらに夏休みに実施した職場体験学習を通して、生徒たちは企業のエコを調べ、分かったことを学年集会で発表し、お互いの考えを共有した。「エアコンの温度設定が28度」「使わない部屋の電気は消す」「そうじなどで使用した水を使用しての植物への水やり」など、企業が取り組むエコは多数あり、生徒の中には「私も家のエアコンの温度設定を28℃にするようになりました」と話す生徒もいた。ここで、「どうして企業は利益追求とは関係のないエコの取り組みをするのか」に課題が焦点化されてきたので、単元前半のまとめとしてCSRを学ぶ時間を構想した。

② 環境家計簿に出会う 第7～13時

これまでの学習をCSRとしておさえるために、社会見学や職場体験学習の振り返りをする学年集会を設定し、ゲストティーチャー（GT）を招聘して、事業所のエコの取り組みについて話し合った。事業所ごとにエコの取り組みを発表しながら、企業が社会貢献をしている理由を考え、GTのお話でCSRをまとめた。さらに、二酸化炭素の排出削減のためには社会全体で取り組むことの大切さを実感することができた。

また、これまでの実践から環境問題を学んでいくと生徒の視点が世代を超えた未来へと広がっていくことが明らかになった。そこで、環境問題を学ぶことは社会とのつながり、未来とのつながりを意識して考えたり、行動したりしようとするESDのねらいと共通すると考え、ESDの視点や留意点を取り入れ、持続発展可能な社会をイメージできる学習になるようエコ活動の教材化に取り組んだ。今回の学習では環境家計簿の取り組みを通して、防災やエネルギーの視点からもエコ活動を考えることができるように、気仙沼市の中学校との環境家計簿の数値比較の場面を設定することにした。

③ ECOアクションで深めよう！絆 第14～15時

10月になると、生徒たちは環境家計簿作りに取り組んだ。家庭で消費されている電気、ガス、水道などの具体的な数値を知り、そこから今の自分にできるエコ活動（ECOアクション）を考え、実行してきた。第1回環境家計簿報告会では、グループや学級全体でその数値の比較を行ったり、順位付けをしたりして分析を試みた。

さらに、東日本大震災で被災した気仙沼市の環境学習や復興に挑む中学生の取り組みを学び、持続可能な視点で街づくりを考える時間を設けることにした。本校のように環境学習を実践している気仙沼市立唐桑中学校と交流し、環境家計簿の数値を比較する授業を行った。この交流では、被災の経験談も聞くことができ、持続可能な視点で社会を見直し、自らの生き方を見直すきっかけにすることをねらいとしている。そして、相手校の学級の雰囲気や生活の空気も感じながら授業を進めたいという思いから、テレビ会議の形で授業を構成することにした。唐桑中学校とのテレビ会議を行うにあたり、生徒が環境家計簿の数値やエコの取り組みに対して、自信をもって自分なりの意見を発表することができるよう、グループごとに意見交換する場面を設定した。また、気軽に話ができる人間関係を作

るために、給食の時間や帰りの会、昼放課の時間など、授業以外の場面も使ってこまめに唐桑中学校と交流する場をもった。導入で両校の環境家計簿を比較したところ「ガソリン代はなぜあんなに多いのかな。震災でバスとか動いていないのかも」「電気代はこちらの方が多。福島原発が止まっている影響があるのかな」など、震災に触れるつづやきが数多くあった。そこで、唐桑中学校に震災当時の様子を質問した。家が流される、仮設住宅での生活、2週間風呂に入れなかったという先生の話、ライフラインが止まり生活に困窮したなどの話を丁寧にしていただいた。本校からは、「オリジナルエコバッグを作る」「エコ条約を結ぶ」などのアイデアが出され、唐桑中学校の生徒から同意する声があがった。

④ 未来の原子力発電を考えよう 第16～18時

3学期は、環境学習プログラムの2年生と3年生の橋渡しとして、1年間のエコの取り組みを振り返り、これからのエネルギー供給について考える授業を構想した。これまでの学習で、生徒たちは環境家計簿に関する学習を通して、電力がエネルギー消費の基盤にあり、環境に多大な影響を与えていることを実感した。さらに、唐桑中学校との交流から、防災の視点で持続可能な社会づくりを考えることの大切さに気付いた。また、追究の中で、「エネルギーの未来」「持続可能な社会のイメージ」という新たな課題が浮かび上がってきた。そこで、発展学習として原子力発電のあり方を考える話し合いの授業を構想した。本学級の生徒たちは、6月に社会見学で静岡県浜岡原子力発電所を見学している。世間で原子力の安全性の問題が取りだたされ、国内の原発が相次いで休止になるのは社会見学の2週間後である。見学時、生徒たちは二酸化炭素を排出しないエネルギーというイメージで原子力発電の特長を学んでいる。そうした情報を押さえている生徒たちが、持続可能な社会に必要なという視点で価値判断する授業として計画した。16, 17, 18時の小単元では、特にH多様性、C責任性を大切に手だてを考えた。まずR16では、教科横断的に社会科の学習を取り入れ、日本と世界のエネルギー供給の実態や原子力発電と自然エネルギーによる発電の違いについて学習した。さらに、17時で学びが進むにつれて原発反対派と賛成派が対立してきたので、18時で討論会を行うことにした。18時の話し合いでは、生徒の意識をゆさぶる資料として「ゆうだい君の手紙」を提示することにした。資料から、多様な立場の考えの存在に気付き、総合的に判断する必要性を実感させるようにしたいと考えたからである。

授業では、最初に脱原発賛成派と反対派の代表生徒を一人ずつ指名し、基調提案をさせ、その後、少数派であった反対派の生徒から指名した。

反対派は、人間の生活がエネルギー消費によって成り立っていることを根拠にして、原子力発電の必要性を述べた。それに対して賛成派から、放射線の危険性や節電の取り組みによって電力不足は回避できるなどの意見が出た。

教師のねらいは、原子力発電を通して自分たちのエコ活動の必要性を実感することであったので、賛成派の考えが広まった段階で、ゆさぶり資料として「東電の責任」という新聞記事、それに対し

<授業記録 第18時>

T20：みんなの生活に電気ってそんなに必要

C16：昔の人は電気をそんなに使っていなかったの、電気は必要ないと思います。

T21：本当に必要ないの。

C17：昔は便利な家電もそんなになかったの、電気は必要なかったけど、今の私たちの生活には携帯を使ったりと必ず電気をを使うから、電気を使わない生活なんて不可能だと思います。

C18：現実的に電気がない生活は無理だけど、原子力も危険だし……。新エネルギーで将来は電気をなんとかしていきたい。

●東電の責任 ●ゆうだいくんの手紙

C19：「原子力は危険、危険」って言っていたけど、僕は夜遅くまで起きて電気を使っているの、無責任だと思いました。

C20：テレビを見たりして電気をを使うから、これからはみんながエコを意識して生活するといい。

C21：みんなで今後原発をどうするかを話し合う場をもっとつくる。

て書かれた「ゆうだい君の手紙」を提示した。資料から、原発に関して多様な考えがあることを知り、C19、C20、C21の考えが出された。授業後の感想にも、「現実として原子力発電が停止に向かっている今こそ、自分たちは行動しなくてはならない」と書かれたものがあり、自分の生き方そのものを考え直している姿が見られた。

資料6

ゆうだい君の手紙 (一部省略)

突然ですが、僕のお父さんは東電の社員です。三月二十七日の毎日小学生新聞の一面に「東電は人々のことを考えているか」という見出しがありました。読んでみて、無責任だと思いました。

みなさんの中には、「言ってるのとおりじゃないか。どこが無責任だ」と思う人はいると思います。たしかに、ほとんどは事実です。

……(略)……

原子力発電所をつくったのは誰でしょう？もちろん東京電力です。では、原子力発電を作るきっかけを作ったのは誰でしょう。それは、日本人、いや世界中の人々です。なぜ、そう言えるかということも考えなくてはなりません。発電所を増やさないといけないのは日本人がおそくまでスーバーを開けたり、ゲームをしたり、無駄に電気を使ったからです。

……(略)……

あえてもう一度書きます。ぼくはみんなが話しかけることが大切だと言いたいので

実践Ⅱ 中学校3年生の実践

「低炭素社会を実現しよう」第23～24時

2年生では、地球温暖化の原因となっているCO₂排出量を、環境家計簿によって算出してきた。各家庭の電気や水道、ガスなどの明細表をとっておき、その使用量に係数をかけて行った。その他にも、1か月のガソリン使用量やごみの量まで調査しなくてはならなかったため、環境家計簿を完成させるまでに大変な手間がかかった。そこで、本年度は、電力だけに焦点を当てて調査することにした。また、原発再稼働問題や節電目標〇〇%などのニュースが毎日のように報道されていたため、生徒たちの電力に対する関心も高く、より自分事としてとらえることができると思ったからである。

さらに、今回は「エコ活動」を追究テーマとして設定した。節電意識が社会で高まっており、生徒たちも関心を示していた。「5%の節電ってできるのかな」「この夏は大変になりそうだな」という思いを掘り起こし、自分たちのエコ活動について討論する授業を構想した。クラスを3つの追究グループに分け、調査活動を行った結果、-2.6%という二酸化炭素の削減値を得ることができた。

■新エネルギーについて調査しよう (エネルギー調査隊)

緑陽台へ調査に行き、いろいろなことを知ることができてよかったです。太陽光発電は設置する費用は高いけど、10年ぐらいで設置費用分が返ってくるし、CO₂も出ないし、とてもいい発電方法だと思います。私の家にも付けたいです。でも、取り付け費用が高いらしいので心配です。

(「エネルギー調査隊」生徒Dの感想)

原子力発電は、CO₂を排出しない発電として近年まで急速に増加しており、日本の総発電量に占める割合は大きかった。しかし、東日本大震災以降は、放射能の危険性をもつとして次々と運転を休止している。2年生の最後に、脱原発についてどう考えるかという授業を行った時には、多くの生徒が未来社会を視点として原発について問題意識を高めた。そこで、原子力発電や新エネルギーと言われている太陽光発電、風力発電などを、メリッ

このままではいけないと思います。このクラスでも2.6%しか節電できていないので、日本中の人を取り組んだとしてもあまり変わらないと思います。

(エコチャレンジ集計後の生徒Cの感想)

ト、デメリットに分けて調べることにした。そして、原子力発電については、どのような危険があるのか、再稼働に向けた安全対策は本当に大丈夫なのかという視点で、詳しく調べた。また、太陽光発電については、学区の新興住宅地に建つ家の屋根にはソーラーパネルが多く設置されていることから、聞き取り調査を行った生徒もいた。

■エコアイデアを考えよう（エコアイデア組）

低炭素社会の実現に向け、特に電力消費を抑えるという視点でエコアイデアを考えた。家庭や会社でできるエコを調べたり、電化製品別に消費電力量を調べたりしたことで、今後の生活に生かせることを見つけようとする姿が見られた。また、夏を乗り越えるためのエコグッズを調査し、さまざまな商品が開発されていることも学んだ。

昼間は、エアコンの消費電力が一番多いことが分かったので節電したい。また、エコグッズは年々高性能になっているので、これを使えばこの夏は大丈夫。

（「エコアイデア組」生徒Eの感想）

「この夏を乗り越えるエコ活動を考えよう」第25～27時

ここでは、まず前時まで3つのグループに分かれて調査したことを発表し合い、まず情報を共有した。その後、節電が叫ばれている夏を乗り越えることができるのか、乗り越える方法は何かということ話し合うようにした。

◆「徹底討論！エコで乗り越えられるのか？今年の夏」（第27時）

この夏の節電目標は5%と言われていたため、それが可能かどうかという考えをもち、ポジティブ派とネガティブ派に分かれて討論を行った。

前半は、エコが継続的にできるかどうか話し合いの中心となった。ここでのポイントは、クラス全家庭で取り組んだエコチャレンジの結果がマイナス2.6%に終わったということだった。ここからエネルギーの現状について視点を設け、話し合いを深めたかったので、T13の教師の出を行った。この日の数日前に大飯原発が再稼働したことで、この地域の節

<第27時の授業記録②>

T13：大飯原発が動いたよねえ。それに関して、つい数日前、君たちが調べ学習しているときにこれまで削減目標、節電目標が5%ですよって言ったのがなんと「0%」になりました。つまり、制限解除。もう5%もなしと発表されました。

C16：その中部電力が0%にしたこともだめだし、原発が、それは中部電力のことではないですけど、大飯原発つけてしまったこともやっぱりよくないと思います。せっかく今まで5%で頑張ろうって言ったのに、なんでいきなりその大飯原発がついて0%っていうのが、私的には本当に意味が分からなくて、なんか、せっかくここまでやってきたらこれからも節電って言うのを意識して暮らしていけばいいかなって思います。

C17：私もC16さんと一緒に、自分たちが頑張るとか0だからやめるとかじゃなくて、ちゃんとやったほうがいいと思います。

C18：大飯原発が起動しても、起動したからって中電が5%から0%にしたことは許せないもんで。なんでかという東海地震とかが起きるもんで、原発が壊れてまた2011年と一緒になっちゃうもんで0%はやめた方がいい。新エネルギーとかで電気を蓄えた方がいい。

C19：原発を再稼働しても、電力はまかなえるかもしれないですけど、今は放射性廃棄物っていう世界中でどうしたらいいか分からないようなごみがあるわけで、それを今でもなんか再処理とかどうしようみたいな、結局は何も解決しないまま大飯原発も再稼働して、また放射性廃棄物を出すだけなので、もっと放射性廃棄物をどうするかっていうことを解決してからつけるならつけてもいいかなって思います。

電目標は0%という発表があった。生徒たちはそのことを知らなかったため、T13でそのことを伝えた。すると、生徒たちは「よかった」ではなく、逆に意識を高めて「エコ活動の継続」の方向でまとまっていた。

その中で、C19のように、原子力発電の廃棄物について強い関心を寄せた生徒がいた。この生徒Fは、初めは原発推進派であり、昨年度の3

ぼくはFさんの話を聞いて意見を変えました。今は原発を使っても仕方ないかもしれないけど、原発を稼働して電力を確保している中でも節電を頑張っていく必要は絶対にあると思います。それで、将来的には原発を使わなくてもいいようにしていけばいいと思います。 (ネガティブ派・原発推進派の生徒Gの意見)

月に行った「脱原発！あなたはどうか考える？」の討論では、原発がないと生活が維持できないという考えだった。ところが、原発についての調査活動とエコの取組について体験活動をしている中で、「自分たちにも何かできる」という手ごたえを得て、考え方が変わっていった。この生徒Fの考えこそ、未来世代との公平性や自分たちの責任性をとらえていると判断し、クラスに広めたいと思っていた。そこでC19の後、さらに詳しく語ってほしいと願い、問い返しをし、C20を引き出した。そして、「核廃棄物を地下に貯蔵する映像」の提示につなげた。この映像を視聴して、原発推進派であった多くの生徒に、原発に対する意識の変化が見られた。授業のまとめの段階で、意見が変わった生徒に問いかけをしたところ、生徒Gは持続性を視点にして考えが変化したことを語った。

こうして学年を接続して学びを進める中で、生徒たちは未来世代の人々との公平感や平等感を実感し、世代を超えた新しい倫理観で判断、意思決定をすることができるようにな

放射線が、放射性廃棄物のごみになっても出続けるし、将来その放射線が何も出ない状態に戻るには100万年かかるって言われているので、今は自分たちでどうしようどうしようって言ってやってるけど、なんか後世の人たちに原発のごみを預けるだけで、その人たちは何も悪くないのに、今の私たちのために原発を作っているけど、未来の人たちは原発がついてたってことに関して何も得はないと思うので、ごみが増えるだけでだから良くないと思います。

(C20の生徒Fの考え)

った。

5 考察

昨年度の実践後、実施したアンケートの分析を行った。(右図)「あなたは、環境問題の解決のために行動したいか」の問いには、愛知県教育センター実施の数値と比較したところ、本校の生徒の行動化の意欲が高いことが伺えた。さらに、「将来地球の環境はよくなっていると思うか」の問いには「思わない」と答える生徒が同センターの数値よりもかなり高くなっていることが分かる。このことから、環境学習を通して、生徒たちは将来に対して危機感や切実感を抱きつつ、環境問題を自分事としてとらえ、自らの行動意欲を高めることができていると考えられる。こうした成果からも、岡崎市環境学習プログラムにある系統的で主体的な学びを重ね、持続可能な社会をイメージし、自分自身の社会とのかかわりや生き方を具体的に実践できるよう学習を展開していくことが大切であると考えられる。さらにこうした傾向は本校だけでなく、岡崎市内の実践校でも見られる。同アンケートは、平成24年1月に、梅園小学校

将来(50年後)地球の環境は今よりよくなっていると思いますか？

| | とても思う | まあ思う | あまり思わない | 思わない |
|------------|-------|------|---------|-------|
| 1年 | 8.41 | 7.48 | 37.38 | 42.06 |
| 2年 | 3.90 | 3.90 | 42.86 | 44.16 |
| センター 小学 | 10.6 | 41.8 | 34.0 | 13.5 |
| センター 中学 | 3.9 | 15.6 | 42.2 | 35.7 |

あなたは、問題解決のために行動したいですか？

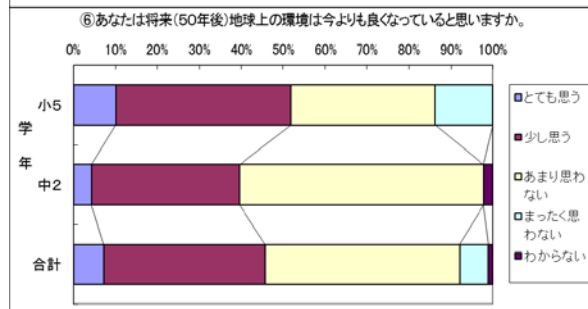
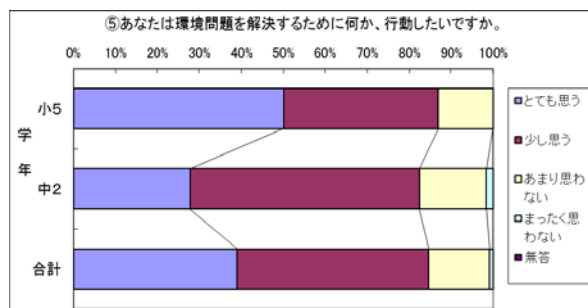
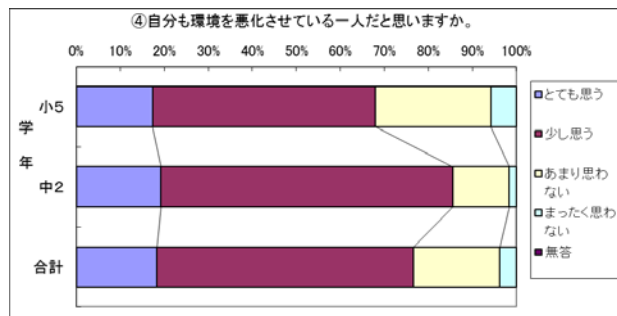
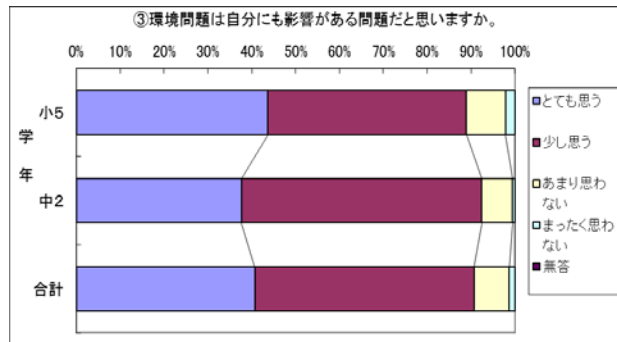
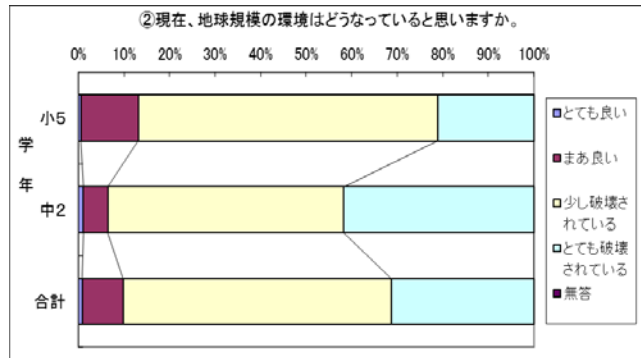
| | とても思う | まあ思う | あまり思わない | 思わない |
|--------------|-------|-------|---------|------|
| 1年 | 54.21 | 29.91 | 14.02 | 1.87 |
| 2年 | 45.45 | 25.97 | 24.68 | 3.90 |
| センター調 査小学 | 47.5 | 37.6 | 14.2 | 0.7 |
| センター調 査中学 | 28.6 | 44.8 | 24.7 | 1.9 |

5年生124名、矢作西小学校の5年生66名、竜南中学校2年生187名を対象に行ったものである。身近な環境については、小中学生合わせると「とても良い・まあ良い」とする回答が40%以上と多かったが、地球規模の環境となると（問②），その割合は10%まで下がる。中学生に至っては95%近くの子供が「破壊されている」という危機感をもっていることが分かる。これは、中学校1年生での「生物多様性に関わる問題」や中学校2年生での「地球温暖化の問題」についての学習が、地球規模の環境問題として意識させているのではないかと考えられる。これは、「事象の本質をとらえるために物事を批判的にとらえることができるようになってきていると考えられる。さらに「③環境問題を自分にも影響がある問題」としてとらえている子供の割合はおよそ90%で、小学校5年生の44%は、「とてもそう思う」と回答している。小学校5年生が「とてもそう思う」の割合が高かったのは、昨年度小学校4年生で「ごみ問題」に取り組んできたからではないだろうか。自分の身近な問題として、ごみの減量に取り組んだ経験が「とてもそう思う」という意識をもたせることにつながったのではないか。

「④自分も環境を悪化させている一人である」という意識については、中学生の方が高い。自分も地球温暖化などの要因になっているという自覚をもつことができたからではないか。これも、未来を作る主体者として自覚することができている結果だと考える。

「⑤環境問題を解決するために何か、行動したいか」という問いに対し、80%を超える子供たちが「とてもそう思う・少しそう思う」と答えている。ただ、中学生の解答結果は小学生よりも低い。これは、本校での実践でも見られたが、行動化の難しさや「自分だけがやっても変わらない」という視点も起因すると考

えられる。そのことは、⑥の「将来地球上の環境は今よりも良くなっていると思うか」という問いに対して、中学生ではおよそ60%の子供が否定的な回答をしていることとも関連する。この問いに関しては、学年が進むにつれて否定的な回答が多くなっていくと予想される。環境問題について、知れば知るほどその問題の深刻さを実感するからではない



だろうか。しかし、記述式の回答の中にもあるように、「広い視野で考え」「自分から進んで行動すること」によって、その展望は明るなものになっていくに違いない。つまり、持続可能な社会づくりのために大切なことは「一人一人の倫理観」であるということが明らかとなった。

6 おわりに

3年間の研究を通して、環境学習そしてESDのキーワードは「探究」であることが実感できる。さらに、学びが深まるにつれて「世代を超えた倫理観」を学ぶ道徳的な授業の必要性が高まってきた。また、私たちは、この実践を通して、学びのキーワードを「つながり」とした。さらに今後は、生徒の行動化のキーワードを「つづける」としていきたい。未来志向の環境学習での視点は、まだ見ぬ世代だが、生徒の生活と行動は「すぐ先の未来」である。生徒の日頃の行動こそESDの検証場面であると考えている。

岡崎市環境学習プログラムでは、「大切なのは答えを教えることではなく、考え方を身に付けることである」とされている。私たちもその理念を踏まえ、よりESD的な発想と手法によって、「未来志向の生き方学習」として確立できるよう、今後も研究を重ねていきたい。



トイレのスリッパをそろえることもESDの「真価」

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（ ）